

8月の思い出

2023-8-12 野口幹夫

KOZOOM サロン28の今月のテーマとして太田様が出して下さったのが「8月の思い出」です。8月というテーマに私が思い出せるのは終戦の日のこと。

じりじりと照り付ける8月の昼だった。疎開先に持ち込んであった我が家の大きなラジオを、隣の家に持ち込んで庭先に面した座敷で、そのラジオを聞いた。正午の時報とともに恭しいアナウンスがあって、それが始まった。聞きなれない声だった。何を言っているのがわからなかった。周りに何人かのおじさんやおばさんが聞いていて、彼らもすぐには理解できなかつたようだった。誰かが「戦争は終わったんや」といったようだった。



そんな大事件だったのに、その時の自分の心の動揺は何も覚えていない。10歳 疎開先の古市国民学校5年生の夏だった。

いっばしの戦争少年でいたと思う。戦艦ごっこもしたし、シンガポール陥落の記念でもらったゴムボールとともに大東亜戦争での勝利の嬉しさは忘れないし、大阪大空襲の恐ろしさは身に染みている。しかしその時、皇居前広場では、大勢の人たちが土下座してひれ伏し涙したのではないか。

それなのに、自分はこの時のラジオや情景は覚えているのに、口惜しさや、安堵感などの強い反応を覚えていないのだ。何故なのだろうか？

この思い出自体が、自分の精神の成長の遅かったことを示しているいい証拠なのではないかと思う。この後新制中学の3年も精神・自我の成長という点では、はかばかしくない。身体も小さく弱々しかかったので、魂の成長も遅れていた未熟児だったようだ。

自分の自我ができ始めたのは高津高時代、やはり刺激になり、親しくなって、長い間付き合ってくれた友人ができてからだと思う。